

# 南島の中世須恵器

## 中世初期環東アジア海域の陶芸交流

The Medieval Sue Ware from the Southern Islands:  
Exchanges of Ceramics in the Pacific-Rim  
East Asian Seas in Early Medieval Period

吉岡康暢

はじめに

①生産技術

②型式分類と編年

③アジア・列島の中世食器とカムイ焼

④カムイ開窯をめぐる史的背景（予察）

### 【論文要旨】

鹿児島県徳之島カムイ窯の中世須恵器は、中国陶磁、九州西部産の石鍋とともに、南西諸島における貝塚時代からグスク時代への転換を具象するモノ資料として注目されてきた。小稿は、1984年度の調査資料について、型式分類とおおづかみな編年区分を提示し、ヤマト列島の東播、常滑、珠洲の諸窯と並ぶ広域窯でありながら、中・小形壺を主産品とする器種組成の特質と、従来からいわれてきた、高麗陶器を主、中国陶磁を従とする技術・意匠を具体的に検討する。その上で、11世紀後半～12世紀前半の環東アジア世界における“人・モノ・技”の交流の実態とシステムの解明に向けた予察を試みる。

カムイ焼は、甕・壺・鉢・碗の4器種よりなり17種31類に分類したが、多様な壺類は高麗の陶技を基調とし、波状文の加飾も高麗系で、窯構造は九州南部と共通するなど、朝鮮半島（高麗）、南九州（日本）、奄美諸島（琉球）を包括する広大な南の境界域で誕生した海洋性の濃厚な中世陶器である。しかも、琉球王朝の成立に先行する中世初期、琉球海900km圏に大流通したことは、南西諸島がヤマト列島の中世食器様式を生みだした物流のネットワークに連動しつつ、アジアの海洋国家の枠組みに組みこまれたことを物語っている。高麗から陶工を招寄したと考えられるカムイ窯の経営形態は、状況的に対宋・高麗貿易とかかわる港湾を掌握した薩摩南部の有力武士の主導下に、奄美諸島の按司層と連携しつつ推進された、中世前期の“倭寇の世界”の所産と推定する。中世初期の日麗間の文物・技術の交流については、日宋関係が成熟するまでの限定的な動向とされてきたが、カムイ焼のほか高麗系屋瓦や刻画文陶器にみられる陶芸史にとどまらず、鏡・梵鐘など金工分野での近年の研究成果によって、予想を上回る広がりや深みをもつと評価してよいであろう。